

日本学術振興会 研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）

中間評価（平成31（2019）年度採択課題）結果

日本側拠点機関名 京都大学ウイルス・再生医科学研究所（教授・野田 岳志）

研究交流課題名 時空間ウイルス学の国際拠点形成

評価結果（総合的評価）

- | | |
|---|--|
| S | 想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。 |
| A | 想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。 |
| O | B ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。 |
| C | 成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。 |

所見

本課題の研究成果に関しては、共著論文および学会・シンポジウムにおける共同発表ともに、令和元年度は概ね成果があがっていると考えられる。一方で、令和2年度で成果があがっていないことについては、新型コロナウイルス感染症の影響を考慮に入れる必要があるが、国際共同研究は並行して複数が進行していることから、コロナ禍での対策を明確にし、今後本課題で成果が出ることを期待したい。

若手研究者育成については、新型コロナウイルス流行を逆手にとった海外研究機関も含む若手研究者中心の研究コンソーシアムの設立など成果も出ているが、継続的な育成プログラムが構築されているとは言い難い。何を身につけるのかの目標を設定したプログラムを作成し、そのために必要な交流を考える必要がある。

新型コロナウイルス感染症の影響により、当初の計画通り進まなかった部分がある事は想像できるものの、今後少なくとも数年間に亘って影響があると考えられるため、本研究課題で十分な成果をあげるためには、この問題に対する解決策をしっかりと打ち出すことが必要である。研究計画ではZoomの利用が言及されているが、Zoom利用が可能であった令和2年度における研究や交流の落ち込みを考えると、Zoom利用だけではなく、抜本的な会議・交流システムの構築が求められる。